The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コンテンポラリージュエリーに見る伝統工芸の素材と加工技術の分析
Author(s)	松村, 拓
Citation	デザイン理論. 2025, 86, p. 56-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102493
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コンテンポラリージュエリーに見る伝統工芸の素材と加工技術の分析

松村　拓　京都工芸繊維大学大学院在学

背景

本研究は，伝統工芸技術を活用したコンテンポラリージュエリーの加工技術を分析し，価値創造の可能性を探ることを目的とする。伝統工芸技術がジュエリーにおいてどのように応用され，価値を創造し得るかを解明することは，伝統工芸の現代的意義を再発見する上で重要である。コンテンポラリーの最前線を示す場となる「Schmuck」2024 で日本の伝統技術を取り入れた作品が高評価を得たことを受け，出展作品を分析対象とした。これらの作品の分析を通じて，どのように伝統工芸技術を応用し，伝統的な素材や工芸技術の価値創造に貢献しているのかを導き出した。

方法

本研究ではジュエリーの加工技術に着目する。また，素材自体がクリエーションを先導し，加工プロセスにクリエーションの独自性が内在していると考える。コンテンポラリージュエリーの制作プロセスを「素材選定」「成形加工」「表層加工」の 3 つの段階に分けて分析し，これらの素材と各プロセスの特徴を詳細に書き出す。それによって作品がどのような属性を持ち，どのような組み合わせで出来ているのかを考察した。さらに各プロセスの加工方法がオズボーンのチェックリストにのどの条項に適合するかを導き出すことで，より抽象度が高く端的な言語化が実現できた。

結果

寺嶋孝佳氏による和彫の技法を用いた「Portrait」というブローチ作品では，本来和彫が持っている図像を描く役割とは対となる，図像を部分的に破壊する行為が行われていた。素材選定は代用，成形加工は縮小・結合，表層加工は結合・転用・逆転で説明できる属性を有していた。

関美令氏と浅野絵莉氏による漆塗りの技法を用いた「Layer」というブローチ作品では，漆の道具的な機能を排することで，表現に特化した独自の塗り重ねの技法に昇華されていた。素材選定は結合，成形加工は縮小，表層加工は拡大で説明できる属性を有していた。

浅井美樹氏による漆塗りの技法を用いた「Green vase and flicker」というブローチ作品では漆と鉱物顔料や金箔を交えたミクスドメディアでできており，漆単体では表現できない表現がなされていた。素材選定は結合，成形加工は結合，表層加工は変更・結合で説明できる属性を有していた。

Miriam Arentz 氏によるエナメルの伝統的な技法であるギヨシェ技法を用いた「traces in time」というブローチ作品では，本来七宝やギヨシェ彫刻を用いない琥珀に，技術の断片である彫刻だけを施していることが特徴的であった。素材選定は変更，成形加工は結合，表層加工は縮小・転用で説明できる属性を有していた

これらの作品の分析を通じて，コンテンポラリージュエリー作品から「世代を超えた伝統の継承」，「技法の再解釈と現代化」「文化的価値の発信と地

域活性化」「異素材の組み合わせによる価値の再発見」という伝統文化の価値創造の可能性を見出すことができた。

発展

筆者自身による作品と，指導学生作品において，今回の分析研究の考え方を元に制作した作品 4 点に触れた。

筆者の作品は布目象嵌における布目切りの技術に着目した。本来見えなくなる布目切りの繊細な技術を可視化する作品で，布目象嵌技術の断片を利用することで新たな価値創造を目指したものになっている。

1 つ目のレーザーカッターと象嵌七宝の技法を利用した指導学生による作品では，レーザーカッターを利用してアクリル板に彫刻を施して，鋳造加工を経て金属へと変換した後に七宝を施すという手段で，技法の再解釈と現代化を提案した。

2 つ目の学生作品の日本の建築技術を伝えるジュエリーでは，身につけるジュエリーパーツを外して保管する際に伝統的な建築技術が体験できる作品となっている。縮小の方法を工夫することによって新たな体験価値を生み出すことができた。

3 つ目の学生作品の裂織技術を応用した水着作品では，廃棄される幟を短冊状に裂き幟の広告機能を破壊することで，色彩だけを残した新しい素材を生み出し，地域の文化価値を発信することができた。

結論

本研究を通じて，加工研究という視座から作品を観察し，それを構成する要素を言語化することで直感的な美しさだけではない創造性と，価値創造の可能性を発見することができた。この分析結果を通じて伝統工芸技術とジュエリーとの交差点となる作品制作や，学生の指導に発展することができている。また，発展した作品からは連鎖的に新しい属性を生み出すことができており，本研究を継続して作品制作を行なっていくことで，新たにクリエーションの要素を紡ぎ出していくことができると言える。